



## 「神々の国しまね」へようこそ ～おもてなしの心で地域の魅力づくり～

島根県知事 溝口 善兵衛

島根の知事として、最も大事なことのひとつは、産業振興によって雇用を増すことだ。そのため、企業向けセミナーやトップセールスなどで都市部に出かけることが多い。

以前、テレビのクイズ番組で「もっとも場所がわからない県」となったことがあるが、「島根県」がどこにあるか知らなくても、「出雲大社」を知っているという人は多い。「出雲大社」が「島根」と結びついておらず、素晴らしい観光素材が十分に活かされていないところがある。

平成 20 (2008) 年 9 月から、島根と京都を主な舞台とした NHK の朝の連続テレビ小説「だんだん」が放送された。別々に育てられた双子姉妹が出雲大社で運命的な出会いをするところから物語は始まる。ちょうどこの頃から、「パワースポット」や「縁結び」といったテーマで、出雲大社や島根県内の神話ゆかりの地が、さまざまなメディアを通して取り上げら

れるようになった。

そして、平成 22 (2010) 年、奈良県で「平城遷都 1300 年祭」が行われた。記念式典に出席していて、2 年後の平成 24 (2012) 年に「古事記」編纂から 1300 年目を迎えることに気がついた。

「古事記」は上・中・下巻の三巻から構成されるが、その上巻には「日本のはじまりの物語」である神話が記されている。そして、その上巻のおよそ三分の一を、島根を舞台とした出雲神話が占めている。

しかも、島根には大量の銅剣や銅鐸などの青銅器が発見された荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡、48m もの高層建築だったと言い伝えられる出雲大社など、古代における隆盛を物語る史跡・名所が数多く残っている。そして、ごく日常の人々の暮らしの中にも、古くから大切にされてきた神事や神楽などの伝統が息づいている。

さらに、平成 25 (2013) 年には、出雲大社の 60 年ぶりの大遷宮が執り行われる。

こうした歴史的な節目は、島根が神々の時代から受け継いできた魅力を、全国の多くの方に知っていただく絶好の機会になると考え、「神々の国プロジェクト」を始動させた。

実は、このプロジェクトのねらいは、神話をテーマとした「島根のブランド化」だけではない。

まず、県民の方一人ひとりに、「神話」を一つの切り口に郷土の素晴らしさを再発見していただくこと。

そして、そうした島根の歴史文化を活かして、ゆったり、じっくりと島根を楽しむ「滞在型」や、繰り返し訪れてくださる「リピーター型」の観光客の方々を、「心を込めておもてなしをする地域の魅力づくり」を進めることにある。

このプロジェクトのシンボル・イベントとして、出雲大社周辺を主会場に、神話の博覧会「神話博しまね」を開催(H24.7.21～H24.11.11)したが、そこでの目玉の一つは、「しまね魅力発信ステージ」(特設ステージ)である。神楽・民謡をはじめとする郷土芸能のほか、演劇やバンド演奏、ダンスなど、県民参加によるバラエティに富んだステージを日替わりで開催した。これには、県民100人に一人にあたる、延べ8千人もの県民の皆さんに出演していただいた。

中でも、県内各地に伝わる様々な「神楽」

は連日大盛況だった。地域で守り継がれてきた「神楽」はどれも皆、個性豊かで、迫力があり、多くの人を惹き付けた。

また、島根の文化や伝統芸能について学んでいる高校生による「神々の国へようこそ! 高校生の文化発信ステージ」や、全国から神楽の継承活動に取り組む子どもたちを招いた「全国子ども神楽サミット」、柿本人麻呂と人麻呂の妻、依羅娘子との恋歌「石見相聞歌」をテーマにした「全国万葉サミット」なども開催した。

どの会場でも、とりわけ、若い人たちや子どもたちが、島根の良さや伝統をよく理解し、自分たちの活動に自信を深めていく姿を見て、次の世代へ引き継がれていく頼もしさを感じた。

プロジェクトの一環として、東京、京都の国立博物館でも、出雲をテーマにした特別展を開催した。荒神谷・加茂岩倉遺跡の銅剣、銅矛、銅鐸、そして県外では初めての展示となった出雲大社の境内で発見された巨大な宇豆柱うずばしらといった、「本物」を間近で見ることができたと、ご好評をいただいている。

島根を訪れる皆さんには、「島根にしかできない贅沢」を味わっていただきたい。地域の魅力づくりやおもてなしにさらに磨きをかけ、県民をあげて皆さまをお待ち申し上げている。